

既往妊娠分娩歴の今回妊娠に及ぼす 影響について

東京大学医学部産科婦人科学教室

水野 正彦, 神保 利春, 佐藤 孝道
箕浦 茂樹, 安部 正雄

I 研究の目的

近年の医療技術の進歩により、特に先進国においては周産期死亡は激減したが、これ伴って異常児発生を如何に予防するかということが大きな関心をもたれるようになった。そこで妊娠経過中の異常が、その児にどんな影響があるかについては最近多くの報告がなされているが、既往の妊娠分娩やその異常および人工妊娠中絶が次の妊娠における胎児に如何なる影響を及ぼすかについては未だ報告は多くない。そこで今回われわれは東大電算機システムを用いる事により retrospective に分娩総数 3444 例について既往妊娠分娩歴と今回妊娠の児の予後との関連について統計的検討を行ったので報告する。

II 研究の方法及び対象

対象は 1973 年から 1976 年までの 4 年間に東大病院で分娩した産婦 3444 例であり、各症例について、既往妊娠分娩歴・今回妊娠経過・妊娠合併症・胎児新生児の異常との関連を computer TOSHIBA ACOS 6 を用いて分析した。

今回の妊娠分娩において胎児・新生児異常に関連抗体の有無、妊娠貧血、羊水過多症あるいは自然流産、早産、予定日超過などの妊娠持続期間の異常またはその他の妊娠合併症であり、更にまた新生児に関するものとしては、体重、身長、巨大児、未熟児、先天奇形、胎児仮死、新生児仮死、新生児経過の異常などである。以上の項目のそれぞれについて母体年令、経妊回数、経産回数、既往の自然流産、早産、胞状奇胎、子宮外妊娠、あ

るいは人工妊娠中絶がどのような関係をもっているかについて分析した。

III 成績

1. 異常抗体の出現頻度

3444 例のうち 69 例が陽性であり、陽性率は 2% であった。既往の人工中絶や自然流産回数との関係は認められないが、経産回数が 3 回以上の場合には陽性率は 4.3% とやや上昇し、2 回以下の場合の 2 倍となった。

2. 妊娠貧血の検討

妊娠貧血としては Hb 11.0 g/dl 以下をとりあげて統計処理した。全例にしめる頻度は、47.7% であった。妊娠貧血は経妊回数、経産回数、自然流産回数、妊婦の年令のいずれとも関連はなかった。

3. 今回自然流産症例の分析

今回の妊娠が 24 週以前に終わった症例を自然流産とすると、その頻度を年令別にみると、21 才以上では年令の増加とともに 1.2% から 14.3% まで順次増加していた。また 20 才以下でも 25% と頻度がきわめて高いが、これは加齢とは別の要因によると考えられる。経妊回数、経産回数と今回の自然流産との関係は特に認められなかった。

4. 今回早産症例の分析

今回妊娠が 24 週 1 日から 38 週 0 日までに終わった早産例について、母体年令、経妊回数、経産回数、自然流産回数及び人工中絶回数との関係について検討した。早産の頻度は、3444 例中 359 例で 10.4% であった。年令の増加により早産の頻度が増加する傾向が認められた。既往の

自然流産回数との関係を図1に示した。既往の自然流産回数の増加とともに今回妊娠における早産の頻度も増加し既往の自然流産が3回以上の場合には21.1%と2倍の頻度となった。しかし経妊回数、経産回数、妊娠中絶回数との間には特に相関はなかった。

5. 子宮内胎児死亡の分析

3444例のうち86例、すなわち2.5%の頻度で子宮内胎児死亡がおこった。図2には子宮内胎児死亡の頻度と母体年齢との関係を示した。

20才以下の若年妊婦では11.1%、41才以上の高令妊婦では14.3%で、いずれも子宮内胎児死亡が著しく増加していることがわかった。しかし経妊回数、経産回数、自然流産回数、妊娠中毒症回数との間には相関は認められなかった。

6. 新生児異常と新生児死亡の頻度の分析

新生児異常には出生後1週間黄疸、チアノーゼ、嘔吐、下痢、発熱、痙れんなど何らかの異常を示したものの凡てが含まれているが、そのうち新生児黄疸が80%をしめている。新生児異常の頻度は全出産例の9.5%であった。また新生児死亡は1.9%にみられた。新生児死亡率が高いのは当科では合併症妊娠を扱うことが多いためと思われる。母体年齢との関係を見ると、図3の如く41才を過ぎると新生児異常および新生児死亡ともに、それぞれ19.0%および9.5%と著しく増加していた。また自然流産回数との関係を見ると回数の増加とともに、新生児異常および新生児死亡の双方ともに増加の傾向がみとめられた。

7. 先天奇形例の検討

26例に何らかの先天奇形をみとめた。

- 1) 心奇形ではVSD4例、PDA1例、Fallot1例、その他2例であった。
- 2) 四肢奇形では合指症2例、多指症2例
- 3) 腹部臓器では、直腸会陰瘻1例、鎖肛2例、多脾症候群1例
- 4) ヘルニアとしては、そ径ヘルニア2例、臍帯ヘルニア2例、横隔膜ヘルニア1例
- 5) 泌尿生殖器としては、尿道下裂1例、嚢胞腎1例、停留睪丸2例であり
- 6) 神経系としては、水頭症1例、脊椎破裂1例
- 7) 顔面頭部奇形としては、口蓋裂2例、副耳2

例であり

- 8) 筋肉骨格系としては軟骨異栄養症1例
- 9) 染色体異常としては、18トリソミー1例D/G転座1例であった。

例数が十分でないため発生頻度を論ずる事はできないが、今後さらに例数をふやして検討する必要がある。

8. 妊娠中毒症・妊娠合併症について

妊娠中毒症では早産および未熟児の出生頻度が正常妊娠群より有意に高かった。糖尿病併妊では人工的な早産の頻度が高かった。しかしその他の合併症妊娠では胎児・新生児異常発生頻度は高くなく、これは最近の妊娠分娩管理の進歩によるものと思われる。

IV ま と め

現在までの分析により以下のことがわかった。

- 1) 経産回数がふえると異常抗体の出現率が上昇する傾向がある。
- 2) 母体年齢の上昇につれて、流産率、早産率、新生児異常・死亡率がいずれも上昇する傾向がある。
- 3) 自然流産回数の多いものほど早産の傾向がある。
- 4) 先天奇形については未だ例数が少なく、今後の例数の増加が必要である。
- 5) 妊娠合併症の中では、妊娠分娩管理の進歩した現在でも、妊娠中毒症が最も問題である。
- 6) 子宮内胎児死亡は20才以下と41才以上の妊娠に多い。

V 文 献

- 1) 安部正雄ほか：産婦人科における遺伝相談の現況と将来、第17回日本先天異常学会総会抄録集 P80 1977
- 2) 神保利春ほか：遺伝相談と出生前診断、産婦の世界 29:829 1977
- 3) 安部正雄ほか：夫婦ともD/G転座保因者の遺伝相談と出生前診断の1例、第22回日本人類遺伝学会抄録集 P11 1977

図1. 既往流産回数と今回早産の関連

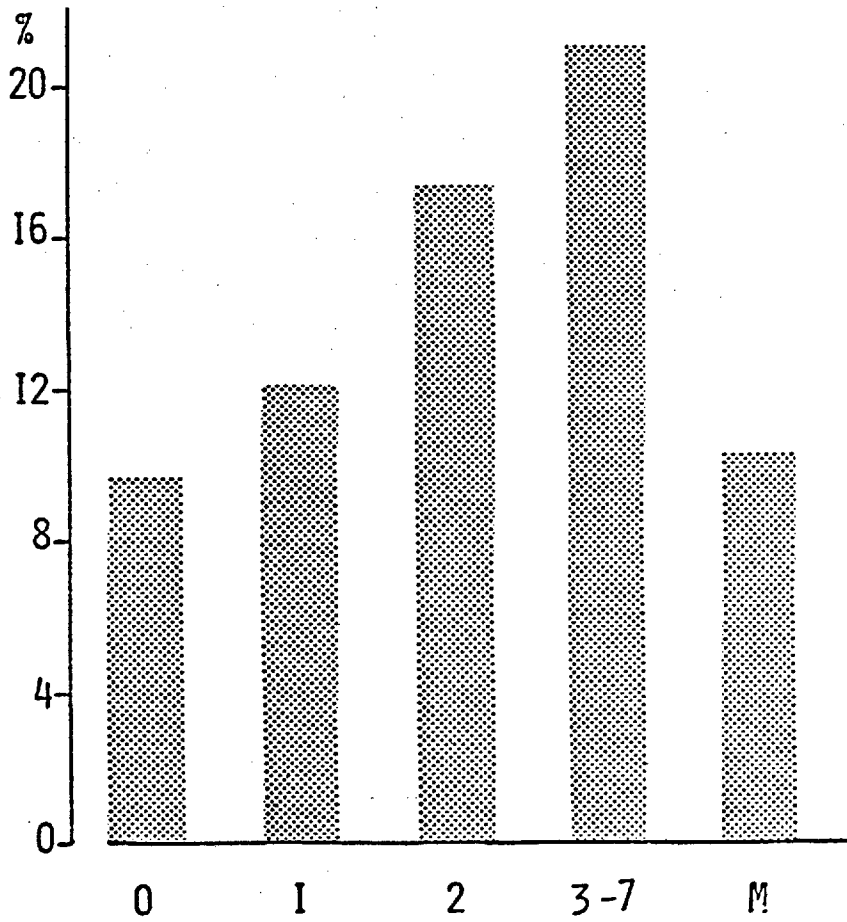


図 2. 子宮内胎児死亡と妊娠年令の関連

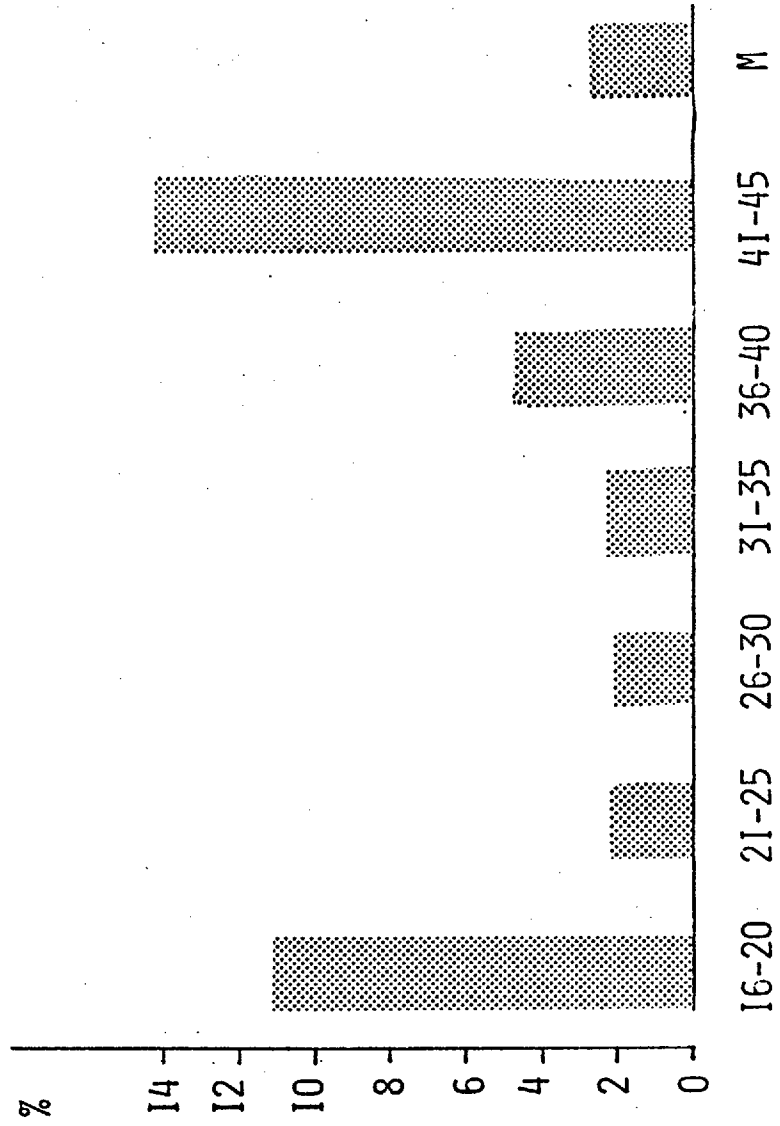
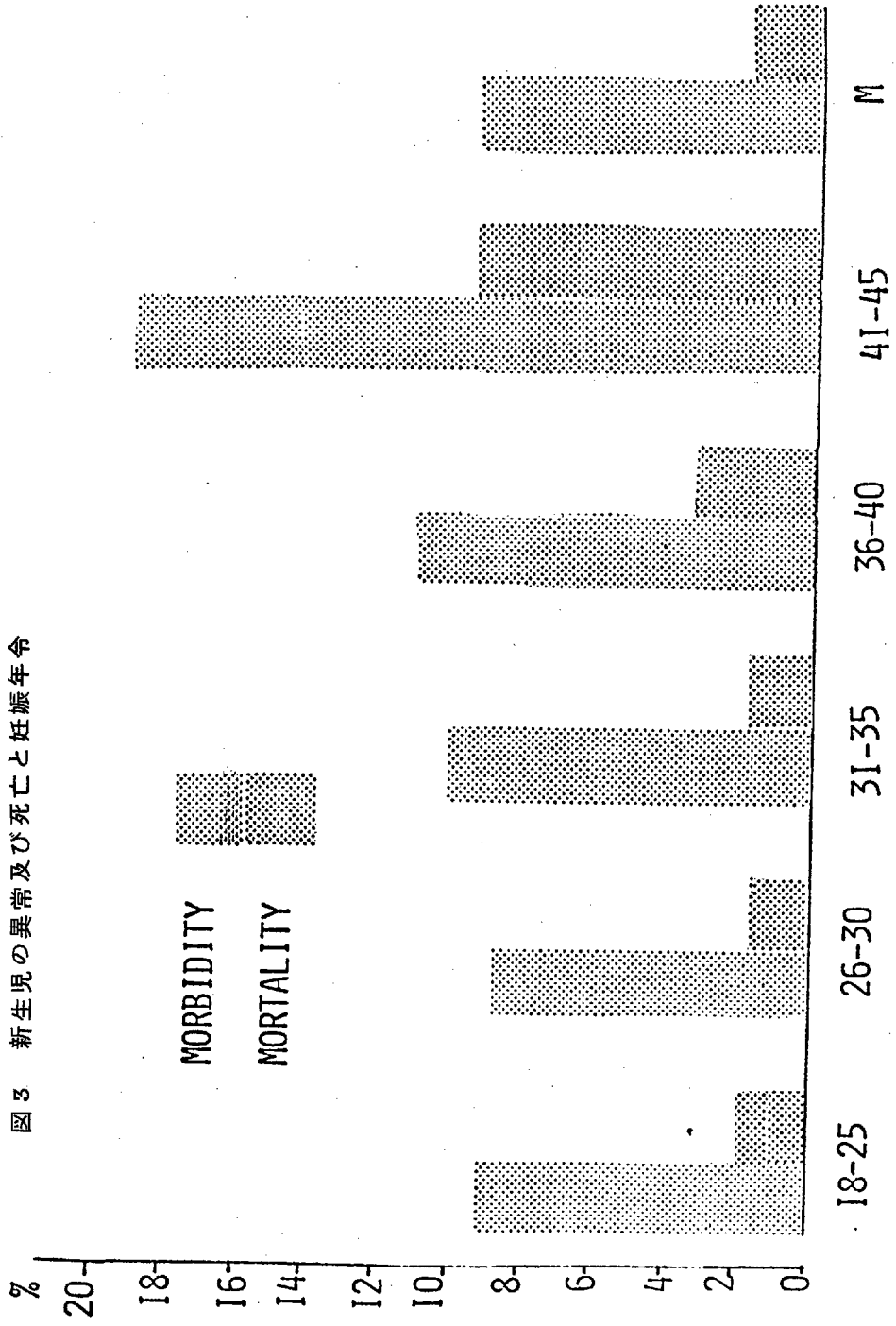


図3 新生児の異常及び死亡と妊娠年齢



↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

研究の目的

近年の医療技術の進歩により、特に先進国においては周産期死亡は激減したが、これ伴って異常児発生を如何に予防するかということが大きな関心をもたれるようになった。そこで妊娠経過中の異常が、その児にどんな影響があるかについては最近多くの報告がなされているが、既往の妊娠分娩やその異常および人工妊娠中絶が次の妊娠における胎児に如何なる影響を及ぼすかについては未だ報告は多くない。そこで今回われわれは東大電算機システムを用いる事により retrospective に分娩総数 3444 例について既往妊娠分娩歴と今回妊娠の児の予後との関連について統計的検討を行ったので報告する。